

## 絵本、作ってきた

京都市立中京もえぎ幼稚園（京都府京都市）

[5 歳児]

**< 4 歳児の時 >** ウコッケイ（ゆきちゃん）を保育室で飼っている。毎日保育者と一緒にゲージを掃除して餌をやり世話をした。産んだ卵を触ったり、落として割ってしまったり、また、卵を温めてひよこが産まれたことを見守ったり、3 学期には卵を調理してもらいみんなで食べたりするなどの経験をする。

**< 5 歳当初 >** クラスの子どもたちとのつながりが深いので、進級後も一緒に生活をする。4 月の始業式からウコッケイが毎日卵を産むようになった。

そこで、卵を一人一つずつ持ち帰ることにする。子どもからの提案で名簿の順番に毎日持ち帰る。一人ひとり、卵を持ち帰ることの意味は様々であった。



**< 保育者の思い >** 「4 歳児の時は産まれた卵は自分のものとしての受け止めではなく、みんなで様子を見たり少しずつ分け合って食べたりした。その卵を自分のものとして受け取ることで、新たな思いが出てくるのではないか」「ゆきちゃんと同じ保育室で生活してきた子どもたちが卵をどのように思っているのか、また、雛をかえたことで食べるなんてとんでもないと思っているのか」などいろいろ考えた。

買ってくる卵とゆきちゃんの卵とでは子どもの思いは違うだろう。現在、物的に豊かな生活ができる環境に在り、一つの卵と向き合うことが大事ではないかと考えた。

### 事例 卵が割れてしまって…

A 児 = A 保育者 = 保 A 児の母親 = 母

時期…4 月下旬

籠式の箱を用意し、割れないように昨年度の 5 歳児が栽培した綿を底に敷き、そこに産まれた卵を入れて持ち帰るようにした。A 児はいつも感情をあまり表現しない。

2、3 日前から自分が卵を持ち帰ることを楽しみにしていた A 児。降園前に卵が入った入れ物を持って満足そうに降園する。ところが降園後、A 児の母親が保育室に慌てた感じでやってくる。

保：「どうしたんですか」

母：「先生、卵が割れたんです。私が持っていて…落としてしまって…」

A 児の母親を見ると手にはスーパーの袋。その中には割れた卵や砂とティッシュが入っている。

母：「どうしましょう？」

保：「A ちゃんは何と？（言ってるのか）」

母：「それが、まだ言っていないんです。どうしたらいいかと…」

保：「A ちゃんに言わないと…」

母：「きっと泣くわ」

状況がわかってきた保育者は、友達親子といた A 児を会話の中に入れる。

保：「あのね、A ちゃんの卵、お母さんが持っていて落としてしまったん」

A：（黙って聞いている。）

保：「A ちゃんから預かって持っていた A ちゃんの卵、割れちゃったの」

A：うなずく。そしてようやく意味がわかり、泣き始める。

保：「お母さん、A ちゃんの卵を割ろうとして落としたんじゃない、間違っ落としてしまわったん」

A 児は「嫌や・嫌や・あーん」大きな声で泣き、母親も顔を手で覆い、わっと泣く。

保：「うん、うん…嫌やなあ（A 児の背中と胸に手を当ててなでながら）A ちゃんの気持ち、よくわかるよ。でも、お母さんは割ろうと思って割らはったのと違うねん」（泣きそうになるのをこらえ動揺を抑えながら話す）

母：「A ちゃん、ごめんね」と謝る。

A 児は「嫌や、嫌や」とダダをこねるように泣く。

保育者は「A ちゃんわかる？お母さん、ごめんなさいって言わったの」と誰にでも失敗があることや母親が謝っていることを繰り返して話す。保護者も謝る。

A 児は少し落ち着いてくる。しばらく沈黙する。



保：「Aちゃんの気持ちもよくわかるよ。楽しみにしてたもんな。昨日やその前から卵を持って帰るのを楽しみにしてたもんな」

A 児の母は何度もうなづく。

保：「でもお母さんの気持ちもよくわかるわ。大事やし、ちゃんと持っておこうと思ってたのに間違っ落ちてしまっって、今どうしようって思っってはるのもよくわかるわ」

母：「Aちゃん、この残ってる卵の殻でお家で遊ぼう。卵の殻に絵の具で塗って」

保：「すごーい！お母さんいいこと考えてくれはったなあ。卵の殻に絵の具をぬるのやって」

(しばらく沈黙)

A 児は少し気持ちが落ち着き、泣き止む。保育者が「Aちゃん、どう？お母さんの気持ちわかる？」と言うと、A 児はうなづく。保育者は「よかった。お母さんのことわかってあげたんやなあ」と言う。

A：「じゃあ、明日もう一回持って帰る」

保：「うん…それはどうかなあ？みんなの卵やし、先生一人では決められへんわ」

A 児は考えている。母親はうなづく。

保：「ゆり組さんの卵やし、先生一人では決められへん。明日、みんなに聞いてみていいって言わはったら持って帰れるけど、みんなに聞いてみないとわからへんわ」

A：「じゃあ、いいって言わはったら持って帰る」

保：「そうやなあ。そうしよう。明日聞いてみよう。今日はAちゃん我慢してえらかったわ。それもみんなに言おうな。じゃあ、お家で卵の色を塗ったらまた教えてね。それも楽しみ！」

A 児の母は深々とお辞儀をして A 児と一緒にドアを出て行かれた。

## 事例 絵本を作ってきた！

**絵本** 「ゆきちゃんが卵を産んでその卵からヒヨコが産まれた」という話で、割れてしまった卵の殻を卵のところに糊で貼って使っている。

翌朝、晴れ晴れとした表情の A 児がやってくる。

A 児は保育者に「おはよう。Aちゃん絵本作ってきた！」と言い、絵本を入れた袋を見せてくれる。

保：「いいねえ。素敵な絵本、誰が考えたん？」

A：「Aちゃんが考えて、お母さんが紙くれはって」

保：「いい絵本やねえ。卵の殻もついているし、すごーい！」

A：「みんなに見せてあげてもいいけど、この卵の殻の所は触ったら取れるしあかん。糊でつけてあるけど、取れるねん、触ったら」とみんなに作ってきた絵本を紹介する。

そこで、殻のところを触らないようにして絵本を楽しむ。

その後、他の子どもたちも「ゆきちゃんの絵本作り」をするようになる。



## 考察

たった一つの大事な卵だからこそ、残された殻の貴重さを大いに感じたのではないだろうか。買ってきた卵だったらこれほどまで（殻のひとつかけらも）大事に扱っていなかっただろう。大事に飼育しているゆきちゃんの卵であり、クラスのみんなが順番に一つずつ持ち帰るという約束ごとがあるからこそ、壊れれば違うものが代償として与えられるのではなく、代わりになる同じものがないという貴重な経験ができた。また、卵を家庭に持ち帰ることで、お家の人と一緒に卵にかかわる経験ができ、今回の体験をした A 児と母親は関係が深まった。本音でぶつかっていかねばならないことを母親自身も経験できた。

## ポイント

一つの卵への特別な思いがあるために、割れてしまった卵にも他では味わえないような感情を体験しています。絵本を作る時も、触ると壊れやすい卵の殻を丁寧に扱っていたと思われます。保育者も保護者も真剣に子どもと向き合ったことで、残された殻を使って絵本を作るという提案につながりました。**子ども自身も卵が割れた現実と母親の困惑した悲しい様子に正面から向き合うことで、改めて一つひとつが大切な卵であることや母親の自分への思いを実感し、科学する心が育まれています。**